

---

# 魔法先生ネギまーアギの ■ ■ 生活？ー

トンヌラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギまーアギの ■ ■ 生活？ー

### 【Nコード】

N4317S

### 【作者名】

トンヌラ

### 【あらすじ】

え？、ちよっ、なんですかこの展開ッ！

アギ・スプリングフィールド、ネギの兄として出来る限り頑張りますッ！

今のところヒロインは『相坂さよ』さん一名の予定です

## 1 (前書き)

おかしいな？

ネギの弟として仲良く頑張る話を書こうとしたんだけど……

ネギの兄      年齢は12歳です

燃えている

村が燃えている

僕の住む村が

僕の大切な人達の住む村が

僕の大事な弟の住む村が

僕の目の前でゴウゴウと燃え盛り、ガラガラと崩れ落ちている

今、目の前の家が崩れ落ちた

意味が分からない

何故、僕の村が燃えているか理解出来ない

昨日、近所のおじさんや、おばさんとお喋りしてた広場がボロボロになっている

ー昨日、スタンおじいちゃんがお酒を飲んでいたお店は、キレイサッパリ無くなっていた

ついさつき、村から少し離れた木陰で居眠りする前は、なんにも変わら無いいつもの村だったのに

なんで？

どうして？

ナンデ？ドウシテ？ナゼ？

「アギッ！」

気付いたら、ジャンおじさんが、僕の名前を叫びながらこっちに走って来てる

「ジャンおじさん……」

「ここに居たらダメだッ！すぐに逃げッ！」

カッッッ！！！

「……………え？」

何か光ったと思ったらジャンおじさんが石になっていた

訳が分からない

人が石になるなんてそんな事知らない

村が燃えている事も、人が石になる事も、何も分からない

ガラ……

ッ！？

崩れた家の影から二人の人影が出て来る

……いや

…人じゃ…ない

人には翼なんてない

人には角なんか生えてない

人の目はあんなに大きくない

人の口はあんなに開かない

人は………

「ホウ、イキテイルノカ、ハズシタカ？」

「イヤ、アノオッサンガ、ガキヲカバツタミタイダゼ」

…人はこんはバケモノじゃない

3メートル位ありそうな大きな黒いバケモノと  
2メートル程の赤茶けたバケモノ

「あ…あ…あ…」

体が動かない、逃げなくちゃいけないのに、足が震えて動いてくれない

「ヒヤハハ、ビビツチャツテルナ〜、カワイソー」

「ククツ、イッテヤルナ『アクマ』ナドミルノハハジメテナノダロ  
ウヨ」

「ひっ……」

少しずつ少しずつここに近づいて来る自分の事を『アクマ』と呼  
ぶバケモノ

そして、後2メートル程で手の届く位置に來ると、小さい方の『ア  
クマ』が口を開いた

「ヘエ………コリヤア……」

ナア、ダンナ…

コイツクツチマツテイイカナ？」

………え？

クツチマウ？

クウ？

食う？

は？………え？

「ダメニキマツテイルダロウ、ニンゲンハヒトリノコラズ、イシニ  
スルヨウニ、イワレテイルダロウガ」

「デモヨウ、コイツノ『マリオク』ヲミロヨ、ガキノクセニスゲー  
『マリオク』ダ  
ゼツタイウマイゼ？」

「ムウ、シカシナ……」

「チカクニハダレモイネエ、ホカノヤツラダツテゼツタイ『ツマミ  
グイ』シテルゼ？」

「……………」

「ナッ！、クツチマオウゼッ！」

「……………ハンブンハ、ワタシガモラウゾ」  
「オツケーッ！、ジャアオレハ『ウエ』な」

「ナラ、『シタ』はワタシガモラウゾ」

『ツマイグイ』

『ウエ』

『シタ』

理解した

理解してしまった

つまり、この『アクマ』達は自分を食べるつもりなのだ

理解してしまった瞬間、今まで動かなかった体が嘘の様に良く動く  
さっきまで震えていた足がしっかりと地面を踏む

にげるにげるにげるにげるにげるにげるにげるにげるにげるにげる  
ニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロニゲロ  
ニゲロニゲロニゲロニゲロ

逃げるッ！

「はっ、ひいッ！」

「チッ！、ニゲタゾ」

「ツカマエルゾッ！」

早く、もっと早く、速くッ！更に速くッ！

捕まったら……

捕まったらなんて考えたくないッ！

……………けど僕の体力なんてささやかな物で……………

……………あんな強そうなバケモノから逃げられる筈も無くて……………

.....倒壊した家が道を塞いで、逃げ道が無くなった.....

又ウ、と、僕の体に影がかかる

「テマドラセヤガツテ」

「マツタケダナ」

後ろには顔の右から左まで、パツカリと割れた口が二つ

ギラギラした瞳が四つ、こちらを睨みつけている

「ひいッ！」

いやだ いやだ いやだ いやだ いやだ いやだ いやだ  
いやだ いやだ イヤダ イヤダ イヤダ イヤダ イヤダ  
イヤダ イヤダ

「ヒヤハハ、モウニゲミチモナイナア」

「アキラメロ、コゾウ」

ゆっくり、ゆっくりと、こちらに近づいて来る

「く、来るな、……来るなッ！来るなよおッ！」

「ウンガワルカタナ」

「サツサトアキラメテラクニナツチマイナツ！」

黒い手がこちらに伸びる

黒い手の隣には赤茶けた手が伸びてくる

「ひいッ！イヤダイヤダイヤダッ！」

赤茶けた手が胸の辺りを  
黒い手が腰の辺りを掴む

イヤダ、誰か助けて、死にたくない、食べられたくないッ！

ギリ、ギリギリギリッ！

「ああ、ああああ、ああああああッ！？」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い  
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

ゴキッ！ゴキゴキッ！

「ぎいいいッ！ぎゃああああああああああああああッ！  
」！

ペキヤッ！

「ゴボッ！、がつ、ぎいいい、………あ」

………ネギ、無事かな………

ブチッ

『悪魔襲撃事件』

生存者 二名

ネギ・スプリングフィールド

ネカネ・スプリングフィールド

ネギ・スプリングフィールド

ネカネ・スプリングフィールド

を含む三名を除く村人は石化した状態で発見

行方不明者 一名

アギ・スプリングフィールド



## 1（後書き）

続きますよ〜

次からは明るい展開になりますよ〜  
この作品では

悪魔は契約でしか魂を手に入れる事が出来ず  
普通に食べたりする分には魔力を吸収します  
よってアギの魂は無事です

## 2 (前書き)

次から明くなるとか言っていましたけど……すいません、まだシリ  
アス

ここは………

見たことの無い部屋だ…

あれ………僕は………

確か、今日はネギが釣りに行ったのを見送って……  
その後村から少し離れた木陰で眠って………

帰ったら村が燃えてッ！？

そうだッ！村はッ！？

それにネギ、僕の弟はッ！？

早く助けに行かないとッ！

釣りに行った池は村からかなり離れてるけど………

もし何かあつたら………ッ！

「ん………んん………」

………へ？

視線を下ろせば………

毛布に包まってベッドで眠っている可愛い僕の弟の姿

無事……だったんだ……

………よかった

「ん……ふああ、…？ここは？」

起きたみたいだ……

見た感じ怪我は無いみたいだけど

目に見えない部分に怪我してる可能性も十分にあるから……

『ネギッ！、怪我は、痛い所は有るッ！？』

………

『ちよっ、無視は酷いよネギッ！

………はッ！まさか目と耳が………』

コンコンっ

「ネギ、起きたかしら」

部屋に響くノックの音と

………この声はネカネ姉さんかな？

「ネカネお姉ちゃんッ！」

……………耳は聞こえるみたいだね……………

ドアの所まで真っすぐ進んでるし……………目も大丈夫みたいだね……………

酷いよネギ……………シクシク

『ネカネ姉さん、ここは何処なの？

ネカネ姉さんが居るって事はウェールズの魔法学院なの？』

「ネカネお姉ちゃん……………ぐず」

「ネギ、大丈夫よお姉ちゃんがついてるからね……………」

『……………無視ですか……………新手のイジメなのツ！？酷いよネカネ姉さんツ！』

従姉弟そろって無視だなんてツ！

僕そんな怒られる様な事してないよツ！？

「ネカネお姉ちゃん……………兄さんは見つかったんだよね？」

「ツ！……………まだ見つかってないわ……………」

だけどきつと大丈夫だからツ！

なんてたってアギはネギのお兄さんなんだからツ！」

「うん……………ひつく……………うううう」

ネカネ姉さんにしがみつきながら、ぐずるネギ

ネカネ姉さんはポケットから小さな杖を取り出した

「疲れてるんだからもう少し寝てなさい……  
きつと大丈夫だから………」『眠りの霧』」

ネカネ姉さんが魔法かけると、さっきまでぐずってたのが嘘みたい  
にネギが寝ちゃった

……全然展開に付いていけないんだけどネカネ姉さん……

何がどうなってるの？

と、言うか、僕はここに居るんだけど……

コンコンっ

「開けるぞ、ネカネ」

「お祖父様……、どうぞ開いています」

ノックの後に更にお客さん、立派な髭を生やした少し色黒のお爺さん  
ムギお祖父ちゃんだ

ウェールズ魔法学院の院長をしてる  
とっても凄い魔法使いで

僕のお父さんと、ネカネ姉さんのお母さんのお父さんだつて、前に  
ネカネ姉さんに教えてもらったんだ

やっぱりムギお祖父ちゃんが居るって事は、此処はウェールズの魔

法学院なのかな？

『え〜と…………』

お祖父ちゃんは無視しないよね？』

「ネギはどうじゃ…？」

「今、眠らした所です」

『……………うん、何となく分かってたから、悲しくなんて無いよ…』

シクシクシクシク……

今も目の前に居るのに完璧に無視、ネカネ姉さんだけに話し掛ける……

眼中に無い、なんてレベルじゃないよ……

「お祖父様、アギは……………」

「……………むう、村に調査を出した……………」

その結果、村の東、倒壊した家の近くに……………」

……………大量の血痕が発見された、……………その血痕はアギの物だと判明した」

『「え？」』

何を……………言って……………」

《ヒヤハハ》

《アキラメロ》

頭に…、声が響く…、この声は…、誰の…

ゾクツ！？

……駄目だ、聞いちゃ駄目だ、この先を聞いてはいけない……ッ！

「そん……な、じゃあアギは……」

「……………」

……でも、聞かなくちゃ

聞きたくないけど…

聞かなくちゃいけないんだ……ッ！

「う、嘘ですお祖父様ッ！、アギは大丈夫ですよねッ！？、お祖父様ッ！」

「発見された血痕の量は、致死量を遥かに超えている……」

あの日、何があった？

ネギを送り出した後、木陰で昼寝した後、燃えてる村を見た後……  
…ドウナッタ？

ジャンおじさんに会って、その後

「だって、村の人は石になってるけど皆居るんでしょッ!？」

「……………」

《ホウ、イキテイルノカ、ハズシタカ?》

《イヤ、アノオッサンガ、ガキヲカバッタミタイダゼ》

……そうだ、おじさんが石になったんだ、そしたらバケモノが出てきたんだ……

「ネカネ、叶わない希望は下手な絶望よりも辛い  
悪いことは言わん……諦める」

「そんな……ッ!?、お祖父様ッ!？」

《ヒヤハハ、ビビツチャッテルナ、カワイソー》

《ククッ、イッテヤルナ『アクマ』ナドミルノハハジメテナノダロ  
ウヨ》

そう、バケモノは…アクマで、僕はアクマに会って…………ッ!、追  
い掛けられたんだ…

……なぜ?

《チカクニハダレモイネエ、ホカノヤツラダッテゼツタイ『ツマイ  
グイ』シテルゼ?》

《オツケーツ！、ジャアオレハ『ウエ』な》

《ナラ、『シタ』はワタシガモラウゾ》

食べられる、そうだ、食べられる、アクマに喰われるッ！？  
だから、逃げ出したんだ……ッ！

「……………」

「嘘、嘘よ、アギは無事よッ！、怪我をして動けないだけで何処かに……………」

「ネカネ……………ッ！」

追い掛けられて、崩れた家に逃げ道を塞がれたんだ……

《テマドラセヤガッテ》

《マツタクダナ》

それで……………

それで……………

その後……………

《ウンガワルカッタナ》

《サツサトアキラメテラクニナッチマイナッ！》

……ッ！

「ネカネツ！」

「ッ！、お祖父様……」

「ネカネ……、アギは、アギは……」

そっだ、そっだつた僕は……ッ！

「アギは【死んだ】のじゃ……」

『僕は【死んだ】んだ……』

それを理解……、いや、思い出した瞬間、やっと気付いた

自分の視点が少し高い事

体が妙に軽い事

足の感覚が無い事

そして

僕の腕が、【透き通って】いて、腕の後ろの景色が見える事に

僕が幽霊と言われる存在になっていた事に

## 2 (後書き)

おそらく次もドシリアス

### 3（前書き）

アギの下半身は相坂さんの様に幽霊みたいなヒラヒラになってます

アギは魔法学院に行つてません

もともとそこまで魔法に興味が無かったのもありますが弟が出来てからブラコンになったので

弟を一人にする事なんて出来ないッ！

って感じです

ネカネも便乗しようとしてましたが周りに怒られたので魔法学院に通っているのはネカネだけです

アギの年齢がネギと離れすぎじゃね？

とか

アギの年齢なら母親の事知ってるよな？

と思った人の為

アギは生まれてすぐに村に預けられていていて

ナギに会ったのがネギを預けに来た時だけだった

その時に弟の事を頼まれたから超ブラコンになった

という事で お願いします……

多分出てこない裏設定です

「ネギには、……………アギの事を…？」

「……………伝えねばなるまい」

「そんなッ！？」

「今は寝ている様だからな、起きたら儂が話す」

会話が酷く遠く聞こえる

まるで現実味が無い、僕が死んだなんて、幽霊になったなんて嘘みたいだ

アクマが村を襲った事も、僕が食べられた事も、全部夢で起きたらいつもの生活がまってるって  
言われたらつい信じてしまいそうになる

アクマに追い掛けられた恐怖も、アクマに引きちぎられた体の痛みも、全部覚えてるのに……

「でも、ネギはまだ子供なんですよッ！？」

「子供だったとしても、時間が経てば経つほど辛くなる」

……外に出よう

ここに居ても辛いだけだ

もしかしたら僕が見える人が他に居るかも……  
居たからどうなるって訳じゃないけど……

……あ

ドア……開けられない……

いや、幽霊だから窓とかすりぬけたり出来るかも……

スウ……

『本当に出来たよ……やっぱり、幽霊……なんだ……』

今は、その事実が辛い

ここは……

窓から外に出たら、僕が住んだ所とは全く違う場所が目映る  
僕が出てきた建物は、【ウェールズ魔法学院】と言われる所の様だ  
周りの家より、大分大きく、豪華だ

……そんな事気にしてる場合じゃないか

僕を見る事が出来る人を探さないと…

どこから探そう……

適当に道を、歩…く？いや、浮くかな

してたら誰か居るだろうし……

僕を見る事が出来る人がいるかどうかは別だけど……

もし、もし誰も僕を見る事が出来なかったら、僕は何をすればいいんだ……

誰にも見えなくて、誰にも話し掛けられなくて、誰にも気にされない存在は、何をすればいいんだ……  
ナニヲ………

……ッ！

一人で考えてると悪い事ばかり考えちゃうよ……

誰か……

誰か…ッ！

『誰かッ！』

『僕が見える人はいないのッ！？』

――――

くそッ！くそッ！くそッ！

なんで皆、僕が見えないんだッ！僕はここに居るのにッ！

知ってる人も、知らない人も皆、僕が居る事に気付いてない……

歩いてる人も、買い物してる人も、僕を見てくれない

なんでッ！なんでッ！なんでッ！

なんで……なんだよお……

つい熱くなって、叫び、最終的に涙混じりの声が出た  
それでも周りの人間は誰も気づかない  
もう、その反応に慣れてしまった

グイッ！

つと、急に体が引つ張られる

んッ！？

なんだ……これ

先に進めない……？

目の前には何もない、壁があつて先に進めなくなった訳ではない  
何より壁があつた所で幽霊である自分には関係ない

『んッ！ふんッ！……駄目だ、足が引つ張ら………そういえば足は無いんだった』

下半身辺りから伸びてるヒラヒラ、凄く幽霊っぽい変なのが、引つ張られるみたいに先に進めなくなった

チッ！

さっきから上手くいかない事ばかりで、つい舌打ちしてしまう

……戻るかな……ここに居ても何も変わらない、いや、戻ったからと言って変わるわけじゃないけど………

ネギの事も気になるし……

――――――――――

「うわああああんッ！」

窓の前に来るととんでもなく大きな泣き声が聞こえた

僕の事を聞いたみたいだ……

なんと言つか……僕の事をこんなに悲しんでくれるのは少し……嬉しい

純粹に悲しんでくれる弟がいる事は兄冥利に尽きる

『これも、現実逃避ってやつなのかな………』

「うわああああんッ！」

「ネギ……」

ネギの名前を呼んで、ネギを抱きしめるネカネ姉さん

ネカネ姉さんも、僕の事で泣いてる

「ネギ、ネカネ……」

ムギお祖父ちゃんまで、涙ぐんでいる

皆に何も出来ない自分が酷くもどかしい

何も出来ない、何も……

「うううう……」

ネカネ姉さんに抱きしめられて少し落ち着いた様だ  
少しぐずっているがさっきみたいに泣き叫ぶ程じゃない  
弟一人慰める事の出来ない自分が情けない

「ネギ、大丈夫よ、アギは会えなくなっただけど、きっとネギの側に  
居るわ」

「うえ……？」

『ッ！』

その言葉を聞いた瞬間、僕の中の何かが変わった  
まるで生まれ変わったという様に僕の体が軽くなった様に感じる  
今まで僕が悩んでいたことが酷くちっぽけな物に感じた

『そうか……そうだった』

「アギはネギの事が好きだったもの、きっとネギの近くに  
いるわ……」

「……………うん……」

『そうだ、あの時も、気が付いた時も、1番心配してたのはネギの  
事だった』

アクマに殺された時も、魔法学院で気が付いた時も、1番心配して  
たのはネギの事だった

僕の大切な可愛い弟

「アギはネギの近くに  
いる、あの子はこれからネギの近くでネギの  
事を護ってくれるわ……………」

「……………ほんと?」

『ああ、護る、ちゃんとネギの事を護るよ……』

聞こえて無いだろうけど、そんな事は関係ない  
胸の中に燦っていた想いは、いつの間にか全て無くなっていた

「本当よ、ネギの事を今でも心配してると思うわ」

『ちゃんと護る、絶対に……』

「だって」

『だって』

「アギはネギのお兄さんなんだから」

『僕はネギの兄さんなんだから』

そう、口にした瞬間、僕が別の何かに変化するのを感じた

しかし、嫌な感じはしない、むしろ、何だかこの変化を誇らしく感じる

そして、僕がやるべき事が分かった

何が何でもネギを護る

生きていようが、死んでいようが、幽霊だろうが、関係ない

ネギの兄として、ネギを……護る

### 3 (後書き)

アギの覚醒編

アギのクラスが

【背後霊】から

【守護霊】にクラスアップしたッ！

テレレッテッテッテッ

みたいな…

#### 4（前書き）

こちらでも遅れてすみません…

こっちもまだまだ時間がかかりそうです

夜のウェールズ魔法学院

真つ暗な廊下を箒が滑る

しかし、その持ち主は居らず、箒が独りでに動いている

視線をずらせば雑巾が窓を拭き

ちり取りがゴミを集めている

箒以外にもその掃除道具を持つ人間は居らず、全てが独りでに動いている

ウェールズ魔法学院の七不思議の一つ

【夜中に動き回る掃除道具】である

誰も居ない廊下、しかし確かに何かが居た

『~~~~~』

誰にも聞かれないからだろうか、気分良く鼻歌を歌う存在

ネギ・スプリングフィールドの守護霊(?)をしている一人の幽霊、アギ・スプリングフィールドである

なお、鼻歌はベートーヴェン作、交響曲第九番、通称【歓喜の歌】だった事を追記しておく

『いや、能力も鍛える事が出来て、学院も綺麗になる、良い事ばかりですねッ！』

呑気にポルターガイスト現象を起こし、学院を綺麗にしていくアギ  
アギがこんなふざけた事をしているのは理由がある

-----

今から四年前、ネギがアギの死を知った時、アギはネギを守る事を  
自身に誓った

しかし、アギは幽霊である、それかなり隠密性の高い幽霊だ  
姿を見せて、ネギの害になる存在を驚かしたりする事は出来ない

自分は何が出来たのか？、と悩んでいた時、とある出来事が起こ  
った

魔法学院に入学したネギに対するイジメである

父親が英雄であり、その息子は魔法、勉強、両方に秀でており所謂  
【天才】と言う奴であった

魔法先生達にとっては喜ばしい事であったが回りの生徒達にとって  
は厄介な存在でしかない

ネギに社交性があれば良かったのだが、ネギが住んでいた村では歳  
の近い人間がアーニヤくらいしか居なかった

さらに悪魔襲撃事件のせいで、性格もまだ暗く、友達作りが下手だった

よって

「お前、生意気なんだよッ！」

「親の七光りの癖にッ！」

「何か言ったらどうなんだよッ！」

この結果は当然の帰結であつた

怒鳴られたネギの方は

「……………」

全く相手にせず、本を読んだまま廊下を歩く

脅しにかかる三人をシカトする弟の姿に若干将来が心配になるアギであつた

しかし、シカトされる側からすれば腹が立つ事この上なく

「何か言えよッ！」

ドンッ！

突き飛ばされてしまう

『なッ！暴力はやめなさいッ！』

と言っても聞こえる訳は無く

「生意気な態度とれなくしてやるッ！」

と、ネギに馬乗りになる少年 A

しかし、馬乗りになった少年 A に向けてネギが放った言葉は

「……どいてよ」

身近な人が一遍に多く居なくなってしまった事、そして一番仲が良かった兄を失った為、若干スレかかっているネギ

更に、父親の様な強い魔法使いに成るため猛勉強中の為、それを妨害する少年 A B C は邪魔な存在でしかない

この後、アーニヤやネカネによって少しずつ明るくなっていくのだが

この頃はまだ刺々しいままである

「~~~~ッ！」

ネギから放たれた言葉に激昂する少年 A  
怒りのままにネギを殴りつけようとする

しかし、少年 A の拳にネギが殴りつけられる瞬間……

『やめなさいッ！』

アギの怒鳴り声と共に、ネギが押し飛ばされた時に落とした本が跳ね上がる

跳ね上がった本はネギを殴りつけようとした少年Aの顔に突き刺さる

「ぶげえッ！」

ゴスッ！

と、鈍い音が聞こえ、顔を抑える少年と

「「「ッ！？」」「」」

驚きを隠せないアギとネギを含める少年四人

今、起こった事に驚き顔を抑える少年A以外の動きが止まる

「て、てめえ、何しやがったッ！」

顔を抑える少年Aが叫ぶ

「な、違ッ！」

身に覚えが無いネギは、自分ではないと言おうとするが

「うつせえッ！」

再び殴りかかる少年A

そこに

「…………アーニヤ・バスター・キイイックッ！」

少年Aの顔に救世主(?)の蹴りが突き刺さる

「ぴぎゃあッ！」

ズガンッ！ゴロゴロゴロッ！ダンッ！

と、吹き飛ばされ、転がり、壁にぶつかる少年A

「「「『…………』」」」

あまりの展開に呆然とする四人

「なっ」

「おまつ」

『なんと…………』

「…アーニヤ？」

「あんた達ッ！三人で寄ってたかって恥ずかしいと思わないのッ！」

現れた救世主(?)アーニヤに皆、呆然

「な、う、うつせえッ！ブスッ！」

「てめえには関係ねえだろッ！引ッ込んでろッ！」

「なんですってッ！あんた！もう一回言ってみなさいッ！一人じゃ何も出来ないヘタレの癖にッ！」

我に返った少年達（一人はアーニヤの蹴りで気絶中）はいきなり現れた少女を口々に罵り、売り言葉に買い言葉、逆に少女から少年達を糾弾する言葉が放たれる

まさに、一触即発殴り合いの一步手前の状態

アギもネギもあまりの気迫にただ黙って見ている事しか出来ない

しかし、そこに

「お前等、何をしてるッ！」

真の救世主である魔法先生が現れ、その場はおさまり

それ以降、どこかで監視しているのか、ネギのイジメは起こった瞬間に先生達が飛んで来る様になった

その時は気づかなかったが、少年Aの顔に叩き付けられた本がポルターガイスト現象による物だと分かった

幽霊になったのだから幽霊の特技が使える様になった事に気づきその日以降、幽霊っぽい事を沢山試し、段々と幽霊らしくなっていた

ポルターガイスト現象を利用し、夜中に音楽室のピアノを鳴らして

みたり

夜中に箒やちり取りを使って掃除してみたり

窓に血文字を浮かべた後、掃除してみたり

ラップ音を鳴らしてみたり

悠々自適な幽霊ライフを送ったりしていた

鍛えた能力もしっかりと役に立っており

先生が見てない所でネギを闇討ちしようとした生徒に軽度の呪いをかけたりしていた

呪いと言っても、使えるのは精々、背筋に寒気を感じたり、どこから視線を感じると、その程度の事しか出来ないが……

ネギに悪意を持った人間はネギに近づくと妙な寒気を感じ、誰かに監視されている様な感覚に陥った

段々とネギに敵対する人間は減っていった

ネギの見えない所でネギの敵を少しずつ減らすという

何か間違った守り方な気がしないでもないが、考えない様にしながらネギの敵を減らし、着々とウェールズ魔法学院の七不思議を増やしていった

『次は何を始めましょうかね』

『あッ！、【夜中に図書室の本が飛び交う】っていうのも悪く無いですね』

『いや、しかし、歴代校長の肖像画を飛ばすのも悪く無い』

『悩めますね……』

さすがに四年も経てば暗さも吹っ飛び、明るく幽霊ライフを送っている

と、言うより能力の鍛練より七不思議作りの方に力が入っていると  
思うのは間違いではないのだろう……

今夜も、アギは鍛練と趣味を兼ね備えたポルターガイスト現象を  
動させる

なお、ウェールズ魔法学院には七不思議系の話が七どころか二十程  
確認されている

朝、ウェールズ魔法学校の生徒達が次々と起床し、各々の教室へ向かう為、準備をしている頃

ウェールズ魔法学院のとある一室

（ウェールズ魔法学院は全寮制であり、生徒一人に一室与えられている）

その部屋の主であるネギ・スプリングフィールドは、起きた時に毎日欠かさずに行う事がある

「おはよう。兄さん」

今は亡き兄。アギ・スプリングフィールドの写真に挨拶をする事である

アギが死んでから約5年、飛び級を繰り返し最高学年に到達したネギ魔法学院へ入学した当初はまだ村の事、兄の事を引きずっていたが、アーニャやネカネ達のお陰で明るくなり、兄の死も乗り越える事が出来た

『おはよう。ネギ』

ネギには聞こえない声が部屋に響く

写真立ての前、何も無い空間に漂っているアギである

自分の声が聞こえない事は分かっている。しかし弟から自分への挨拶である返さない訳にはいかない

朝のゆつたりとした時間を破壊する声が部屋の外から響く

《ネギーッ！何やってんのッ！遅刻しちゃうわよッ！》

「あ、うんッ！今行くよッ！」

幼なじみの声に慌てながらも微笑みながら部屋を出ていくネギ

「行ってきます。兄さん」

『行つてらっしゃい。……と言っても付いて行くんですがね』

苦笑しながらもネギの後を憑いていくアギ

アギはネギの変化を嬉しく思った

昔は自分の事を想い泣いてばかりでいたネギ。ネギが明るくなったのはネカネの影響もあるが、アーニヤの影響が大きい

泣いているネギに怒鳴りつけたのだ

【アギが死んじゃったのは私も悲しいし村の事だって悲しいッ！でもあんたが何時までも泣いてちゃ、アギが安心して成仏出来ないでしょうッ！】

その後、ネギとアーニヤは盛大に大喧嘩をしたのだが、アーニヤが居なければネギが立ち直るのにまだまだ時間が掛かっただろう

少し淋しく思うがネギは昔の様に明るくなった

ポルターガイスト現象を自在に操れる様になった時、これを使えばネギにコンタクトを取れるのではないかと考えたが、行った事は一度も無い

アギは幽霊だ、何時消えるのかも解らない

もしかしたらネギに二度も別れを経験させる事になるかもしれない

それに、ネギは皆の手を借りアギの死を乗り越えたのだ。

兄の分も頑張り、必ず【立派な魔法使い】になるとウェールズの近くに作られた、アギの墓標に誓ってくれた

なら、ネギの為に邪魔をする様な事はしたくない

自惚れかもしれないが自分とコンタクトが取れる事をネギが知れば、自分につきつきりになってしまう

そうなれば【立派な魔法使い】の道も遠退き父への道も遠退く。いや、二つの道が遠退く事は無いのかも知れない。しかし、そうなる可能性は十分にある

なら、自分はネギとコンタクトを取るべきではない

確かにこのまま誰にも気づかれる事なく過ごすことは酷く寂しい

だが、本来自分は悪魔に喰われ全てが終わる筈だったのだ。しかし、今の自分は幽霊としてだがネギの近くで、ネギの成長を見守る事が出来る。

これは十分に【奇跡】と呼ぶに相応しい出来事ではないだろうか

これ以上の高望みなどしてはいけないのではないだろうか

そう、ネギが自分の死を知ったあの日。見えなくとも、話すことが出来なくとも、ネギを見守り続けると決めたのだ

そう、過去の誓いを振り返っているアギ

しかし、遠くない未来、日本でアギの誓いがイロイロとぶち壊れる事などアギは知る由もなかった

-----

魔法学院から数キロ離れた野原。

授業が終わり、まだ日が明るい故に禁書庫に忍び込む事は出来ない。ネギとアーニヤは良く魔法の練習の場として使う野原へと来ていた

「……はあ、修業修業修業。ネギ、たまには遊びに行ったりしないの？」

私だっただけには（二人つきりで）買い物とかもしたいんだから、と先程から呪文を唱え続けているネギに愚痴を零す

二人っきりの部分を口に出してはいないが、一緒に行きたいというニュアンスが見て取れる

「ラ・ステル・マ……うん、そういえば最近アーニャやネカネ姉さんと一緒にどこかに行ったりしてなかったや……」

アーニャの愚痴を聞いたネギは、呪文を中断し、最近の出来事を振り返る

禁書庫に忍び込んだり

魔法の練習をしたり

たまに来る父の戦友に稽古を付けて貰ったり

禁書庫に忍び込んだり

禁書庫に忍び込んだり

最近は少しでも多くの魔法を覚えようと禁書庫に忍び込み、覚えた魔法をこの野原で試し撃ちばかりしていた

父の戦友であるタカミチは、根を詰める事も大事だが、たまには息抜きをする事も大事だと言っていた

それに、姉であるネカネ姉さんとも最近話していない

「…うん、ちょうど明日は休みだし、明日三人で街に買い物に行こうか」

これは名案だと、楽しそうにアーニャを買い物に誘うが、ナチュラルに三人と言う辺りアーニャの気持ちには全く気づいて無いのだろう

「三人…、え、ええッ！三人で一緒に行きましょうッ！」

若干、ムツとしたが、ネギがこういった事を言ってくれるのは、殆

ど無い

それに最近はネギにつきつきりでネカネさんとは話していない

二人が明日の買い物後と一緒にどこかに行こう。と、明日のプランを考えているのを、後方で見ている幽霊が一人

『……ネギ、気付いて無いんでしょうね…、アーニヤ……哀れな』

アギである

アギはネギとは違いそこまで鈍感では無い

と、言っても悪魔で他人事だから気付いているのではあるが…

「じゃあ明日ねッ！寝坊するんじゃないわよッ！」

「アーニヤこそ、あつ、ネカネ姉さんには僕が言うておくから」

そう言つて明日の準備をしようと、二人は寮に帰っていく

『あれッ！僕の台詞あれだけですかッ！？』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4317s/>

---

魔法先生ネギまーアギの■■生活？ー

2011年8月17日00時31分発行